弘前大学 学園だより Vol.160

2008年9月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人　弘前大学
「学園だより」編集委員会

委員長
山本秀樹（教育・学生委員会）

委　員
福田健太郎（人文学部）
管田貴子（教育学部）
松谷秀哉（医学研究科）
扇野綾子（保健学研究科）
小松尚夫（理工学研究科）
比留間潔（農学生命科学部）
三浦信義（学生課）
佐々木忠（学生課）

印刷：ワタナベサービス株式会社

9 September 2008

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦　学長

VOL.160

「赤林檎青林檎」　制作　教育学部学生　蝦名　杏菜

Ⅰ　特集「課外活動・サークル活動」 ― 2

弓道部　バスケットボール部
柔道部　児童文化研究部
へき地教育研究会　さくらボランティア
ひまわりサークル　SaBoTen
環境サークルわどわ　TEENS & LAW
アダプテッドスポーツ　弘大ラジオサークル

Ⅱ　海外だより ―― 16

Ⅲ　研究室紹介 ―― 18

教育学部附属
教員養成学研究開発センター

Ⅳ　特別寄稿 ―― 20

Ⅴ　掲示板コーナー ―― 21

Ⅵ　編集後記 ―― 22

特　集
課外活動・サークル活動

バスケットボール部

弘前大学の課外活動（運動部）。田舎臭いのか、はたまた先進的なのか。

教育学部　顧問　本間正行

私は弘前大学に赴任して26年目を過ごしています。同時に赴任当初よりバスケットボール部（男女）の顧問、ヘッドコーチ（日本では監督ですが、バスケットボールを指導している身としてはこう表記したいのです）併任で指導にあたってきました。このたびは、このような立場から弘前大学の課外活動、特に運動部の活動について感じるところを書いてみたいと思います。

弘前大学の運動部活動で最も不思議に思うところは、いわゆる「体育会」という組織がないことです。ちなみに「体育会」という言葉は、日本に外来のスポーツが定着し始めた明治20年頃、高専や大学に課外のスポーツ組織が生まれましたが、慶応義塾が明治25年に「体育会」と名乗りました。これが「体育」と名づけた最初です。他には、明治20年高等商業学校（現一橋大）が「運動会」、明治23年第一高等中学校が「校友会」、明治29年高等師範学校（現筑波大）が「運動会」という名称で組織化しています。

閑話休題。26年前の弘前大学ではたしか「体育会」という名称を使ってはいましたが、形態的には現在とほとんど同じであったと思います。やはり一般的に考えられる組織にはなっていません。ここで言う一般的な組織とは、各スポーツ種目の学連に加盟している団体のみを大学が公認し、それらの団体で組織されているものを言います。ところが弘前大学の組織は、学連に加盟している団体（部あるいはクラブ）も、いわゆる同好会（サークル）と呼ばれるレクリエーショナルに運動を楽しんでいる団体もいっしょくたになっています。平成19年3月現在の大学のデータでは、体育系サークル57団体が大学公認団体となっていますが、例えば学連に所属しているバスケットボール部もサークルで行っているバスケットボールの団体も同列なのです。なんと素晴らしい民主的な大学なのでしょう。ただここで面白いことには、学連に所属している団体は、大学の施設（我々の場合は体育館）を暗黙のうちに優先的に使用できていることです。各団体が並列であるならば、施設を使用する権利は平等にあるはずなので、学連に所属している団体が優先で使用できるということは、現組織形態を考えると本来はおかしいと思います。

こんな考えられない組織を作った人って、いったいどんな顔をしているのか見てみたいものです。もし私が部外者であったり、東京に居て弘前大学の組織を知った場合は、「青森の田舎者め！」と言うでしょう。いやいや、しかし、これが現代における最先端の組織なのかもしれませんねえ。

でも、この超民主的に見えながら、学連所属団体が優先使用しているという矛盾は是正しなければなりません。ただし是正の方向は、学連所属団体が優先であるという方向です。やはり、学連所属団体だけを大学公認団体にすべきだと思います。あるいは、他のサークル的な団体も公認してもいいですが、学連所属のクラブとは一線を画すべきでしょう。

もう1つ感じることがあります。弘前大学の運動部のいわゆる体育会的雰囲気は、全国的なレベルで比較すると極めて低いと言わざるをえません。これは競技成績が良い、悪いに関わらず感じることです。我がバスケットボール部にしてもしかり。なんとかしたいと長年思ってきましたが、なかなか改善できません。また無理やり日本のトップレベルの大学のように厳しく指導しても、おそらく学生がついてこないでしょう。数年前、東北のある国立大学のスポーツクラブの先生（体育）にこんな質問をしたことがあります。「弘前大学は何故弱いんですかね？」。するとこういう答えが返ってきました。「東京から遠いからですよ！」と。実は質問する以前に私が考えていた答えと同様な答えだったのには驚きました。おそらく競技レベルが高い学生が入学してきても、良い競技成績はなかなか出せないと思います。練習中にしても試合中にしても、それ以外の部の活動にしても、何か田舎臭いのです。東京からの物理的な距離がこの差をかもし出していると思います。「弘前は弘前スタイルでいいじゃないか」と考えている人もいるかもしれませんが、それでは向上は望めません。スポーツは弘前の文化ではなく世界の文化ですから。

ここまで冷たい言い方をしてきましたが、私は弘前大学の内部の人間です。自分の所属する大学に愛情が無いわけがありません。定年退職までにまだ数年ありますので、なんとか少しでも良くなるよう、あきらめずに指導していこうと思っています。

ひまわりサークル

サークル活動、それは学生の力

医学部保健学科　顧問　石﨑智子

ひまわりをイメージしたユニホーム（エプロン）姿の草創期「15人衆」と共に（1996年11月撮影）

「ひまわりサークル」は1996年4月に産声をあげました。弘前大学医療技術短期大学部看護学科の学生が結成したボランティアサークルです。そのサークルも今年で13年目を迎え、子どもの成長に例えるならば“中学生”になりました。この場をお借りして、本サークルの誕生の経緯を振り返りながら、その間に接してきた学生たちの姿を少しくご紹介したいと思います。

新年度を迎えたある日、学生3人が研究室を訪れました。彼女たちは看護学科の2年生。1年間看護学の基礎を学び「看護学生として何かをしたい。学生でもできることはあるはずだ」という思いを抱き、相談にきたのでした。1990年代は、民間病院でのボランティア活動が活発になってきた時期であり、私もボランティアに関心を持ち、大学職員として何か社会貢献できないだろうかと考えていた時でした。彼女たちの気迫と情熱に引き摺られるように話し合いを続けました。まず病院の中で学生ができることから探すことにしました。「子どもの生活の中心は遊びであるが、病院ではどのように遊んでいるのだろうか？」「入院している子供たちは、一日中治療を受けるだけの生活を送っているのだろうか？」など疑問を持ち、授業のない週末であれば病棟で子どもたちと遊ぶことができると考え、“附属病院小児科病棟で子どもたちと遊ぶ”という活動を企画し、とうとう同級生15人のメンバーによる「ボランティアサークル　ひまわり」を立ち上げたのでした。

一方社会的な動きをみると、全国の国立大学医学部附属病院における病院ボランティアの導入も徐々に始まっており、病院を取り巻く環境に変化が見え始めていました。そこで、当時の附属病院の亀田和子看護部長に相談し、看護部はじめ医学部事務部の皆様のご理解とご支援をいただくことができました。5月には団体結成に向けた準備を始め、附属病院への手続きを経て、7月12日からサークル活動を開始しました。週末だけのささやかなボランティアですが、今も結成時の気持ちを忘れることなく活動を続けています。その後附属病院ではボランティアが定着し、小児科病棟へ保育士も配置されるようになりましたが、この活動が一つの契機となったような気がしています。

手探り状態で開始したサークル活動でしたから、ボランティアについての勉強会を行ったり、青森市にある青森県生涯学習ボランティアセンターにも何度も足を運び助言を頂き、翌年にはボランティア活動情報紙「かわら版てのひら」にも紹介されました。知識を獲得した学生たちの煌めきは大きく膨らみ、そのエネルギーは随所で素晴らしい力を発揮しました。病棟での活動以外にも、古切手やプルタブの収集、子育てサークルや老人福祉施設での行事への支援など様々な活動を展開しました。ときには弘前市内だけではなく、周辺地域や青森市などに活動範囲を広げたりもしました。

2001年4月に医学部保健学科へ改組となり、サークル活動も受け継がれました。メンバーが医学部保健学科の学生だけとなった2003年4月からは、全学的なサークルとなり「ひまわりサークル」と改称。

13年間を振り返ると、必ずしも順風満帆とは言えません。6、7年も経過した頃、サークルの目指す道に迷いを生じたことがあり、それを機にサークルの目的を見直したのでした。小児科病棟での子どもたちとの遊びを通してエンパワーメントすることを主軸にした活動を行い、そのうえで、無理をせずに自分ができることを行うことにしたのです。所謂「隗より始めよ」という選択でした。また、存続が危ぶまれた時期もありました。結成2年目は27人、それ以降は20～34人の全メンバーで活動してきましたが、ある年は実動するメンバーが10人位に激減。当時はメンバーの多くが医学部の学生でしたから、お互いの職種の紹介や役割などについての勉強会の開催、病気の子どもや家族が書いた手記の抄読、さらにはサークルへの勧誘活動も全学的に展開。努力の甲斐があり、メンバー数が増えました。この危機を乗り越え、今春これまで最少の2人が巣立ちました。

今年度は4学部の学生50人のメンバーで構成されています。様々な学部の学生が交流することは刺激的です。そこで交わされる意見は多様で、興味の視点も医療面だけではないため、学生は多面的な視点を持つようになり、総合大学であることを実感することができているようです。また、ボランティア活動だけではなく、季節ごとの交流会も設け、コミュニケーションスキルを磨くことも忘れていません。今年オリンピックが開催された中国に「為己為人」という言葉がありますが、学生たちはボランティア活動を通して、この言葉の意味を学んでいると言えます。

今年の５月～６月にかけて東北地区大学総合体育大会の主管大学となったバスケットボール、弓道部及び柔道部、本年度学生・ボランティア活動助成を受けた８団体、昨年全国大学放送コンテストで文部科学大臣奨励賞を受賞した弘大ラジオサークルについて日頃の活動状況を紹介していただきます。

弓道部

弓道部の活動

小 林 賢 示（教育学部）

これから弘前大学弓道部について紹介したいと思います。今年の4月弘前大学弓道部には，男女合わせて29人もの新入部員が入りました。現在は３年生までで、男子29人、女子23人の総勢52人で活動しています。言うまでもなく部員の半数以上は１年生です。年中弓道場は笑いの絶えない、活き活きとした場所になっています。

さて、弓道部は現在週５日活動をしています。活動時間は夕方５時から約３時間。ハードだと感じる人もいるかもしれませんが、みんな弓道が大好きなため、弓を引くことは毎日の日課のようになっています。中には、大学から始めた初心者もおり、現在は「初的」に向けて一生懸命練習しています。ちなみに「初的」とは、初めて的の前で弓を引くという形式的なもので、‘もう一人前ですよ’という、通過儀礼のようなものです。

弓道は技術はもちろん精神力・体力を使うものです。そのために初心者には約３ヶ月間基礎をしっかりと身につけてもらう期間を用意しています。弓道は初心者でも経験者でもやることは同じで、「基礎」なので今の時期は指導に熱が入っています。大学で弓道を始めると、経験者が多数いるため、基礎の段階をより正確に早く覚えられると思うので、これから初心者の活躍にも期待しています。

また、弘大弓道部は、全学・医学部弓道部がありますが、基本的に活動は一緒にしています。しかし、医学部弓道部には医学部だけの大会があります。６月の21、22日には仙台で行われた東北地区医科学生体育大会に出場し、女子個人優勝、女子団体３位という成績を収めてきました。

そして、先日行われた全学での、東北地区大学総合体育大会では、弘前大学が主管大学となり、大学の学生課と連携をとり大会を運営しました。７月４～７日という日程の中、弓道部総動員で運営し、試合に臨みました。男子は青森県武道館と黒石運動公園弓道場、女子は弘前大学と弘前工業高校を借りての大掛かりなものでした。そのような中で、女子は予選リーグを突破し準決勝トーナメントへ、男子は準決勝トーナメントを勝ちあがり決勝リーグで戦うことができました。残念ながら惜しくも入賞を逃しましたが、男女ともに次の大会へつながるいい試合ができました。運営にいたっても、進行上に大きなミスもなく、弓道部として1つの試合をやり遂げられたよい機会になりました。

現在私たちは夏に行われる全日本学生弓道大会、秋にある秋季リーグ戦また、その他の定期戦や練習試合に向けて練習に励んでいます。これからは１試合１試合の勝利に向かい切磋琢磨し、どんどん活躍していければいいと思っています。

バスケットボール部

バスケットボール部の活動

飯 塚 真 代（教育学部）

バスケットボール部は、現在男子23名・女子14名・マネージャー3名に監督・コーチを合わせて計42名で活動しています。

週5日約2～3時間、第一体育館で監督・コーチ指導の下、男女共に一丸となり練習に励んでいます。一部リーグで東北上位チームと試合経験を重ねたこと、一部から二部へ降格し悔しい思いをしたことを糧に、今期目標とする秋の入れ替え戦に向けて日々努力しています。

練習は基礎的な体づくりから個々の技術能力の向上、分解練習、試合などを組み込んで行なっています。特に平日の練習は限られた時間しかないため、少ない時間の中でいかに集中して取り組むかが選手には求められます。また、春夏の長期休業期間中は二部練習や日数を重ねて練習ができるため、走り込みを中心として体を絞り、ベストコンディションで試合に臨めるように体を補強します。そして、各大会に向けて照準をあわせ、男女ともに勝利を目指してがんばっています。

昨年は秋の入れ替え戦で、一部リーグから二部リーグへと降格してしまいました。

今年秋の入れ替え戦では、この悔しい思いを部員全員でぶつけ、一部昇格へ向けてこれからも練習に励んでいきたいと思います。

応援よろしくお願いします。

今年度の主な戦績

第63回国民体育大会青森県予選(5.17－18)		
	●男子　ベスト4	●女子　ベスト4
平成20年度春季北奥羽地区バスケットボール大会(5.31－6.1)		
	●男子　ベスト8	●女子　3位
第59回東北地区大学総合体育大会(6.28－30)		
	●男子　ベスト8	●女子　3位

これからの主な大会予定

- 東北地区大学リーグ(9～10月)
- 青森県バスケットボール総合選手権大会(10.4－5)
- 東北学生新人大会(12月)

柔道部

柔道部の活動

竹ノ子　千　春（教育学部）

こんにちは！柔道部主将の竹ノ子千春です。ではまず、みなさんもオリンピックなどで馴染みがあるかと思いますが、「柔道」についての紹介をします。柔道は、ご存知の通り、日本が発信した武道です。1964年の東京オリンピックで正式競技となり、現在は世界中に普及しています。日本以外では、欧州で人気が高く、特にフランスの登録競技人口は、日本の登録競技人口の3倍と、大きく上回っています。

また、柔道をやることで体が強くなることはもちろんのことですが、柔道には「礼に始まり、礼に終わる」という言葉があるように礼儀を重んじており、試合で勝つという単なる勝利至上主義だけではなく、精神鍛錬を目的としています。

このような精神のもと、只今柔道部では元気に活動しています。週に4日の朝練習と、週に6日、2時間半～3時間の稽古があります。朝練習では主に筋トレをやり、朝練習が終わった後は、監督を含め部員全員で、柔道場で朝ご飯を食べています。朝食では15合以上のご飯を炊きますが、柔道部なだけに食欲が旺盛なため、ペロリと食べてしまいます。朝と夜と、1日のうちの大半を柔道部員と過ごすことが多いため、部員同士がとても仲が良く、明るい部活です。そして、そんな柔道部を支えてくれているのは、柔道部の監督である高橋俊哉監督です。

高橋監督は、柔道の技術はもちろんのこと、私たちの人生の約2倍を生きているのにも関わらず、部員の誰よりも力が強く、歯が立ちません。「いつか監督を投げてやろう」という目標は、部員一同思っていることでしょう。また、週に2日は、青森の自宅から競輪自転車で大学までやってきます。時間にして、約2時間。時には逆風の影響により、3時間になることも・・・。しかし、めげない。さらに、監督は多趣味で、柔道だけでなく、スキーや登山（野外活動）もやります。特にスキーでは大会に出場するほどの腕前です。

このように何事もなんなくこなす監督は、まさにスーパーマンと言っても過言ではありません。練習のある日には必ず来てくれる監督は、部員からの信頼も厚く、私たち部員の目標にもなっています。そんな監督のもとで毎日練習ができていることもあり、男子は全国国公立柔道大会でベスト8に、女子は初の全日本（インカレ）に出場することができました。

ところで、今年になってからというもの、柔道部はテレビ出演が多くなりました。5月には、ダーツの旅でお馴染みの「笑ってコラえて」の取材人がうまいもの探しの旅で弘前に上陸し、柔道部が食事をする風景を取材していきました。その模様が7月30日に放送されました。また、6月は、バルセロナオリンピックで柔道金メダリストの古賀稔彦さんが、今年から弘前大学の大学院生として入学してくれたことにより、柔道部の練習に来てくださり、その模様がテレビで放送されました。

このような良い環境で柔道ができているということを心から感謝し、今後の柔道部の目標としては、男子は全日本に出場すること、女子は全日本で1つでも多く勝てるようになることです。毎日の練習、1日のうちのたった3時間の練習を大事にし、部員一同、目標に向かってまた、「文武両道」を目指し、一生懸命柔道に取り組みたいと思います。

児童文化研究部

児童文化研究部の活動

二宮　渉（教育学部）

児童文化研究部（通称Kids'）は、主に2つの活動をしています。

まず1つ目は、三岳児童センターでのボランティア活動です。私達は、年に8回程度三岳児童センターに行って子ども達と遊んでいます。主に、ゲーム・工作・読み聞かせの3点セットが基本形になっています。七夕のときは短冊を作ったり、クリスマスには男子がサンタクロース、女子がトナカイの衣装を着てプレゼントをあげたり、季節感を意識した活動も多々あります。三岳の子どもは、みんなとっても元気です。元気すぎてなかなか言うことを聞いてくれない子もたくさんいます。そんな中で、私達はそういった子どもにうまく対応していく力を身につけていっています。この力は、将来教員を目指している人も、そうでない人も、必ず役に立つと思っています。どんなに手を焼き疲れたと思っても、子ども達が楽しかったと笑ってくれるだけで私達は…。

2つ目は人形劇です。夏休みから秋にかけて私達は人形劇に取り組んでいます。人形劇は、１年生を中心に行っており、人形劇で使う人形も、小道具も、背景も、もちろんシナリオまで全て自分達で作っています。そのため、毎年夏休み後半は毎日練習しなければなりません。夏の暑い日にサウナのような部室で汗を流しながら、腕が痛くなるまで、いや、どんなに腕が痛くなろうともあきらめることなく、更なる高みを目指して練習を続けています。長い練習の日々の中で、いろいろな問題や衝突も起きてきます。オーラが見えなくなってしまった江原さんがいたり、エアーマンが倒せないと嘆く人がいたり、いろいろありますが、毎年それらを一緒に乗り越えた仲間との息の合った舞台は本当に素晴らしいものです。今年も入ったばかりの1年生がみんなで考えた台本が出来上がりました。とっても面白い話が出来上がったと思います。今年は人形劇祭と日程が重なってしまったため、弘大祭でのステージはありませんが、秋には弘前市でも公演をやるので、私達の人形劇をぜひ見に来てください！

そんな私達が自慢できるのは、メンバー全員がとっても仲良しであるということです。１年生から４年生まで本当に仲がよく、とてもいい雰囲気で毎回のサークル活動をやっています。

また、我らが児童文化研究部は今年で創部52年を迎えます。そんな歴史ある部活であることに、私達はとても誇りを感じています。そこで、最後に一つ主張して終わりたいと思います。

私達児童文化研究部は、永久に不滅です!!!

へき地教育研究会

へき地教育研究会とは

岩田和也（農学生命科学科）

へき地教育研究会について、「何の団体だろう？」、「どんな活動をしているのだろう？」と思う方が多いと思います。この機会に多くの方に知っていただければと思います。

それでは紹介をさせていただきます。

活動場所は、小規模の小学校・中学校での活動が主要な活動となっています。現在、平川市の全児童・生徒あわせて10人の小中学校で活動させていただいております。普段の活動は、大学構内の学生団体利用棟で行っています。

目的は、「普段少人数ではできないような経験を子ども達に体験させてあげよう」、「子ども達・学校・地域・学生が相互に関係、協力しあい、よりよい環境を作ろう」というものです。基本は、「子ども達を楽しませよう」という気持ちが大きいです。

活動内容は、運動会や文化祭などの学校行事や宵宮のような地域行事に参加、スポーツ大会やミニゲーム大会の企画・運営を行っています。普段の活動では、各行事にむけて準備や話し合い、子ども達へのバースデーカードの作成などしています。

大きな学校行事は、5月末の運動会、10月末の文化祭があります。運動会では、用具や放送などの仕事の手伝いが基本の活動になりますが、学生も紅白にわかれて、子ども達や地域の方、先生方と一緒に競技に参加したり、応援合戦をしたりと楽しく活動させてもらっています。文化祭でも、幕や大道具などの係ごとの仕事が基本となりますが、学生の劇・ダンスの発表の時間もあります。この劇やダンスは普段の活動時間などに練習しています。

学生企画の活動は、子ども達にいろんな経験をさせてあげられるようにチーム対抗のゲームやスポーツなどを企画し、運営しています。この中には、子ども達との交流を深めるという目的があるので、名前覚えゲームや簡単な自己紹介ゲームなどを行っています。そのための話し合いや準備を行っています。

地域行事では、地域の方々との交流が大きな目的となりますが、子ども達や先生方との交流も行える大きな行事となります。地域行事は参加が活動となります。

このように行事ごとに普段の活動の中身が多様な団体ですが、とても楽しく、やりがいがあります。へき地教育研究会の活動によって、「地域が活性化した。」と言われるような活動を行っていきたいと思います。

さくら
ボランティア

さくらボランティア活動概要

佐々木　刀　太（理工学部）

さくらボランティアは、児童・福祉のボランティアを行う弘前大学・弘前学院大学の合同ボランティアサークルです。

主な活動としては、知的障害者や身体障害者の施設訪問や老人ホーム訪問、施設のイベント・行事などの手伝い、施設利用者の買い物付き添い、余暇活動支援団体の手伝い、手話勉強会など、週末を中心に行っています。

サークルのメンバーのほとんどが、大学に入学して初めてボランティアに取り組んだという者ばかりです。ボランティアというものに興味があっても、一人ではなかなか参加できない人が多いというのが実際ではないか思います。大学のサークルという形であれば、ボランティアに関わりやすく、最も気軽に取り組める方法の一つになるのではないでしょうか。ともに楽しく活動できる仲間があってこそのサークルです。私たちさくらボランティアはこのようなボランティアへの意欲を持った大学生が集まって作られています。

しかし上記のようなボランティア活動をしている以上は、たとえサークルと言えども無責任な行動は許されません。さくらボランティアの活動の中心には、地域の小学生とスポーツをしたり、障害者施設の訪問をして交流をしたりするものなどがあり、非常に多くの人との関わりを持ちながらの活動になります。大袈裟な言い方と思われるかもしれませんが、ボランティアの最中は児童や障害者の方の命を私たちが預かっていることになります。当初は「ボランティアを一度やってみたかった」というような気軽な気持ちで入会したメンバーも、実際のボランティア現場ではそのような自覚と責任を持ち、真剣な態度で取り組んでいます。

このような説明をするとさくらボランティアが非常に堅苦しいサークルなのではと思われるかもしれません。たしかに活動には真剣に取り組んでいますが、ボランティア活動をする本人が楽しく活動できていなければ意味がありません。私たちが活動に楽しさを見失って嫌々活動していては、支援される方にも不愉快な思いをさせてしまうはずです。あくまで「仲間とともに楽しく活動する」ことを念頭に、さくらボランティアは活動しています。

現在、サークル員約40人で今日もどこかでボランティアを楽しんでいます。

ひまわりサークル

「小児科病棟でのふれあい」

佐々木　あゆみ（医学部保健学科）

私たち「ひまわりサークル」は、病気と付き合いながら療養している子どもたちを対象としたボランティアサークルです。現在主な活動として、週末に弘前大学医学部附属病院の小児科病棟を訪れ入院している子どもたちと遊びを通してふれあっています。活動場所は病棟内にあるプレイルームという小さな部屋で、そこに折り紙やパズル、ブロックなどを持って行き、来てくれた子どもたちの年齢や好みに応じたおもちゃを使って一緒に遊びます。

活動日程は活動予定作成係がサークル員の予定を聞き、それを調整して２～５人のメンバーで病棟に行きます。そのため、子どもたちと少し打ち解けられてもまた次の日には違うメンバーが活動するので、子どもたちと一緒に遊ぶにはいつも待っているだけではふれあうきっかけがつかめません。また、頻繁に活動に参加しても、いつも同じ子が遊びに来てくれるとは限りません。そのような活動だからこそ、メンバーも子どもたちに積極的に声をかけたり、折り紙を折ったりと色々なアプローチをして遊ぶきっかけをつかみます。また、私たちはサークル用の活動ノートと病棟への連絡ファイルを作って、その日誰が活動をしてどの子が遊びに来てくれたか、また、何をして遊んだかなどその日の活動状況を記録しています。そうすることにより、サークル員間で情報を交換し、お互いの活動に役立てるとともにサークルとしての一貫性を保っています。

最初は病院ボランティアということで、どういったことをして遊ぶのか、注意しなければいけないことはないのかという思いはどのサークル員にも少なからずあったと思います。でも、実際移動式の点滴をしているものの一緒に遊んでいるときは入院している子どもと遊んでいるという感覚はなく、健康な子か入院している子かという違いはあまりありません。つまり、入院して病気と闘っている子どもであっても、遊ぶという健康な部分はしっかりと持っているということに改めて気付かされます。

このように「ひまわりサークル」では、病院に入院している子どもとのふれあいを通して、子どもの身体的・精神的な成長・発達をそばで感じられます。また、コミュニケーションを通して自分を振り返ったり、新たな発見をしたりと自分自身の気づきの場にもなります。病棟での活動以外にも、学内で勉強会を開催したり、四季折々に親睦会を企画したりとサークル員内の交流も深めながらサークル活動を進めています。

SaBoTen

☆さわやか☆ボランティア☆天使☆ ⇒SaBoTen

岩 松 宏 武（理工学部）

『思いやりの精神』…これが活動を通じて一番強く感じていることです。様々な活動・行事の中で、幾度となくメンバーの優しさや温かさを感じてきました。お互いが自然と相手のことを思いやり、お互いに信頼しあっているからこそ今日のサボテンがあると思っています。今年度は熱心な勧誘活動の甲斐もあり、30人以上の新入生が入部し、現在メンバー数は45人を超えました。メンバー数が多いということは、自分を含め様々な人の価値観を多くの人と共有することができ、それによって新たな価値観の発見＝未知の自分との遭遇に繋がると強く思っています。

サボテンは弘前大学のボランティアサークルの中でも一番活動範囲が広いと思っています。毎週水曜日の午後6時からはミーティングを行っています。その内容は、地域で開催されるイベントのお知らせや、月一回サボテンがイベント企画から運営まで一貫して行い、地域の子供達と交流するサタデースクールの話し合い、大学生活の悩み話など盛りだくさんです。『サタデースクール』とは、サボテン内では『サタスク』と呼んでいる活動で、この活動の目的は「価値観・世代間の壁を超えて、一つの家族のような関係を築く」ことです。今までの企画例としては、ペットボトルロケット、スライム作り、ゼリー作り、ちぎり絵、運動会、ウォークラリー、クリスマスパーティ、お菓子の家作り…などなど多くのイベントを運営してきました。サボテンの活動の中でも一番力を入れている活動でもあります。子供達の笑顔を楽しみに毎月企画をして、企画当日に子供達から喜んで貰えた時に1番の幸せを感じます。また『ギネスに挑戦！アップルパイ』という活動があります。これは地域の人たちと協力してギネス級の巨大アップルパイを作るというユニークな活動です。先日も直径2メートルのアップルパイを作成しました。今年の目標は5メートルのアップルパイ作成です！また『廃品回収』もあります。これは富田清水の町内の廃品回収のお手伝いをするという内容です。そして次に『携帯電話講習会』です。これは東京のNPO団体と協力して行い、目的を「住民の、安全に安心して携帯電話を操作・活用するために必要な知識習得」としています。この活動は今年度から始めており、今後本格的な活動になると期待しています。この他にも『清掃活動』『ボランティアデーへの参加』『梵珠自然の家のスタッフとしての参加』『ねぷた祭りへの参加』『ラジオ収録の参加』『海外支援ボランティア』などなど…たくさんの活動が私達を待っています。

このようにサボテンは学内から県外、果ては国外まで幅広く活動しています。先輩方が地域の人達と交流して切り開いてくれた活動、今年度から新たに挑戦することになった活動を、これからもメンバー全員で協力し、みんなで楽しんでいきたいと思っています。サボテンファイト！！

サークル名の由来
さわやかボランティア天使という意味

環境サークル わどわ

「わどわ節」

前田恭佑（理工学部）

こんにちは。環境サークルわどわです。この文が掲載されている時はもう暦の上では秋ですね。多分まだ暑いとは思いますが…

さて、僕達のサークルでは“気軽に・楽しく”をキーワードに街清掃、リユース市、ビラによるメモ帳作り、放置自転車対策（主に自転車修理）などの活動を行っています。

毎週月曜日の部会で先週の活動を報告したり、今後の予定などを話し合ったりいます。実際に活動するのは水曜日が多いですね。メンバーは10人あまりと少なく、忙しい人が多いので毎回全員参加とはいきませんが、楽しく活動をやらせてもらっています。

先ほど挙げた活動を順に詳しく見てみると　最初の街清掃はわどわの月一回の定期的な活動で、大学周辺を歩いて回り、落ちているゴミを拾うといういわゆる“ゴミ拾い”です。活動しているとありがたいお言葉を掛けてくれる人がいるので、活動の励みになります。

リユース市は３月末に行っているわどわ最大のイベントで、卒業生の要らなくなった家具・家電を新入生や在校生に無償で（！）提供するという活動です。昨年度のリユース市では多くの人や団体に協力してもらい無事開催することができました。ありがとうございました。今年度リユース市をやるかどうかはまだ未定ですが、継続できるように頑張っていきたいです。

その次のビラによるメモ帳づくりは、新歓時期名物の紹介ビラをメモ帳に再利用しようという活動です。新歓期の間、ビラ回収ボックスを学食に設置してそこに不要なビラを入れてもらい、回収したビラから裏が白紙のものを選んで、それをメモ帳として使ってもらうというものです。今年度集めたビラは付属図書館や学食に設置して使用してもらう予定です。

最後の放置自転車対策では、大学の施設環境部の方と共同で、放置自転車のナンバリング作業を行ったり、わどわ内で自転車修理講習会を行って“自分の自転車を直せるようになろう”という目標のもと、活動しています。

わどわでは、今後も“気軽に・楽しく”マイペースに活動していこう！と考えているので、これからもどうぞよろしくお願いします。また、メンバーは一年中募集しているのでこちらの方もどうぞよろしくお願いします。

サークル名の由来

青森の方言で私の輪という意味

TEENS & LAW

TEENS & LAWの活動

石 塚 優 士（教育学部）

我々、ＴＥＥＮＳ＆ＬＡＷというサークルは、弘前大学の教育学部・人文学部の学生が中心となって活動しています。顧問の先生である、教育学部の宮崎先生、人文学部の飯先生・平野先生からご指導を受け、所謂「非行少年」に対するボランティア活動を行っております。

現在我々が行っている活動は、主に以下の五つです。

一つ目に、試験観察中の少年に対する学習ボランティアです。これは家庭裁判所の調査官の方と協力し合いながら、昨年は二件活動を行いました。

二つ目に、保護観察中の少年に対してのともだち活動です。これは勉強を教えたりする他にも、少年の年齢の近い相談相手になったりと活動が幅広いものになりまして、保護司の方やＢＢＳ連盟の方、それから保護観察所の保護監察官の方と協力して、昨年は三件、今年は既に二件活動を行っています。

三つ目に、児童自立支援施設の方との交流です。『子ども自立センターみらい』という施設に入所している子供達とスポーツ交流を行ったり、また、夏休みや受験前に学習ボランティア活動を行ったりと、昨年はかなり活発に交流させていただきました。今年は野球交流の他、毎週土曜日に学習ボランティアとして子ども達と交流するなど、段々と交流が深まっています。

四つ目に、軽度発達障害を持つ子ども達との交流です。昨年度は一緒にボウリングに行って、その後食事会に参加するなど初めて交流を行いました。今年は夏休みに行われるキャンプに、ボランティアとして参加する予定になっています。

五つ目ですが、今までの四つの活動については子供達との交流やふれあいというものが中心になっていましたが、それ以外にも学生自身の勉強として、裁判所で裁判を傍聴することや、大学の学校祭で模擬裁判を実施するなどの活動も行っております。

今まで説明してきた通り、様々な方々と連携を取り、沢山の協力をいただいたおかげで、現在は活動にも幅が生まれ、かなり活発に活動を行えるようになっています。

活動の幅が広い為、どれか一つの活動に特化することは出来ませんが、我々としては様々なケースを頂く中で、子供達にもプラスになり学生自身も勉強になっていくような、そんなサークル活動というものを目指して活動しております。ですから、寧ろ一つに特化せず、様々な場面、立場の活動を体験できるというのがこのサークルの大きな強みだと考えています。

まだまだ未熟なサークルですが、皆様の協力をいただければ幸いだと思っております。

子どもが大好きな方、非行少年との交流に心惹かれる方、法律の勉強をしてみたい方、是非我々と一緒に活動してみませんか？いつでもお待ちしています！

アダプテッド
スポーツ

アダプテッドスポーツの活動

塚 田 香 織（教育学部）

私たち「アダプテットスポーツサークル～爽～」は、知的発達障がいのある方々と共にスポーツ活動を楽しむ、ボランティアサークルです。

主な活動内容は、スペシャルオリンピックスの活動への参加です。スペシャルオリンピックスとは、知的発達障がいのある方々に日常のスポーツプログラムやその成果を発揮するための競技会などの機会を与え、彼らの自立と社会参加を応援する、国際的なスポーツ組織です。この活動に参加している知的発達障がいのある人々をアスリートと呼んでいます。青森県弘前支部では春にバスケットボール・夏は陸上競技・冬はアルペンスキーのプログラムを行っています。

今年に入ってからは、5月18日から7月20日までの毎週日曜日に弘前学院大学体育館で行われるバスケットボールプログラムに参加してきました。ボランティアの主な仕事はアスリートの練習の補助です。場面の切り替えの声掛けや、パス練習の相手などをしました。体育館の広さの関係で午前と午後の2回に分け、それぞれ2時間ずつプログラムが行われました。7月に近づくにつれて、じわじわと暑くなっていき、時には雨が降り気分が盛り下がりそうになったりもしましたが、アスリートの頑張りに励まされ、笑顔に癒され、一緒にバスケットボールを楽しむことができました。名前を覚えてもらえたときの喜びは、絶対に忘れられません。また、参加しているとアスリートの成長や、今までできなかったことがふっとできた瞬間を何度も見ることができました。

9月から陸上競技が始まります。私たちはこれからも継続してこの活動に積極的に参加していきたいと思っています。

弘大ラジオサークル

『知ってください、弘大ラジオ』

須賀将道（教育学部）

私たち弘大ラジオサークルは立ち上げからまだ四年も経っておらず、サークル員も30名程度の決して大きくはないサークルです。アナウンサー志望の人やラジオに興味のある人、裏方・技術的なことをしたい人など色々ですがみんな熱意を持って活動しています。

主な活動としては月に一度の生放送に向けた番組作りが挙げられます（この活動はNPOコミュニティーネットワークCASTという市民団体との協力提携の下に成り立っています）。この番組というのは弘前市周辺で聴取できるFMアップルウェーブで毎月第三土曜日の19時から21時までの二時間の枠で生放送で行っています。

番組は内容としてはいくつかのコーナーに分かれています。弘前以外の出身の弘大生をゲストに招いて弘前と地元の違い（例えば香川では一日に三食うどんを食べることもあるというようなこと）などを話していく『どんだんず弘前』、サークル員が弘大生を代表して「大学生がジャニーズ好きでもいいじゃない」から「レジ袋削減って本当にエコなの」までとにかく主張したいことを語る『弘大生の主張』などのコーナーがあります。

また私たちはラジオ番組作りだけでなくNHK全国大学放送コンテスト（通称「Nコン」、放送の甲子園のようなものです）への参加も行っています。アナウンス部門、朗読部門、ラジオドラマ部門はもちろんのこと、音声CM部門やTVドキュメント部門にも参加しています。サークルとしては昨年初めて参加しました。私たちはラジオサークルなのですが、「夜空に舞う～じょっぱり大太鼓にかける想い」というねぶたに関わる女性を題材にしたTVドキュメンタリーが高い評価を受け、TVドキュメント部門での全国1位とNコンの最優秀賞にあたる文部科学大臣奨励賞をいただくことができました。今年はその他の部門のリベンジの意味も含めて昨年より一層励んでいます。

その他の活動としては総合文化祭などで依頼を受けて司会をしたりもしています。まだまだ若いサークルですが今後もそのような司会や番組及び番組作りなどの活動を通じて、より弘前大学や地域に根ざしたサークルとなっていけたら……と思っています。そして番組作りも聞いて楽しんでもらえる、愛される番組を目指して今まで以上に力を尽くしていきたいと考えています。

私の留学 出逢い編

医学部　保健学科
検査技術科学専攻
佐々木　友紀

2007年2月から12月までの約10ヶ月間、ニュージーランドの南島にあるダニーデンに留学しました。私は、まず先に留学していた友達に会いにオークランドに降り立ちました。入国審査官の言っていることがよく分からず、それまでの興奮気味の状態から一気に不安になったことを覚えています。ダニーデンに着いた時の印象は、北海道の沿岸の田舎町といった感じでした。ただ地元である北海道っぽいというだけで、ここでもやっていけそうと思えた自分の感覚は、その後の留学生活でプラスに働いたような気がします。実際、ひどく落ち込むことはあっても、ホームシックにはなることはありませんでした。

ニュージーランドでは、いい事も悪いことも本当にたくさん経験しました。後者を挙げれば、語学の壁に悔しい思いをしたり、日本と比べて不便な点が多かったり、学務ともめたり、ルームメイトと喧嘩したり、学生のアルコールや薬物等の問題に触れたり、マオリやアイランダーに関する問題を見聞きしたり、捕鯨問題で肩身の狭い思いをしたりなどです。私がやってこられたのは、助けてくれた人達がいたからです。人を傷つけるのは人だけど、助けるのもまた人です。留学生活を振り返ってみると、本当にいい出逢いに恵まれたなと感じます。

まず、結婚していて、子供が二人いて、公務員のような仕事をしていて、週2回は自分が所属するチームでラグビーの練習をし、週末には子供にラグビーを教える、二つ年上のホストマザーとの出逢いと言うのは衝撃としか言いようがありません。家事育児はほとんど彼女がやっていましたが、そんなの、体がいくらあっても足りない！と思って、よく手伝いました。そんなマザーのいる家族との生活ではイースター等のイベントを楽しんだだけでなく、勉強にもなりました。例えば、子供に対するしつけを見ていて、何が大事なのか何がいけないのか基本的なことを学びました。

次に、語学センターに入学した日に、日本人以外の友達をつくろうと思って、頑張って話しかけたことがきっかけで親しくなったタイ人の友達。偶然同じクラスになり、私が悩んでいた時には励ましてくれ、勉強に困っていた時には手伝ってくれたり、本当にどれだけ助けられたか分かりません。日本人を避けておきながら、後半には親友と呼べる日本人の友達もできました。自分でも不思議です。彼女達も日本人と関わらないようにしていたのですから。それに、年齢も立場も関係なく突然友達になれるというのは、日本以外の土地で出逢ったからこそではないかと思います。お互いに刺激し合えて、頑張る励みになっていました。

また、語学センターのアクティビティでトランピングに参加した時には、他のクラスの子とも知り合えました。キャンプ地までは重いバックパックを背負って5時間以上、助け合いながら歩きました。アクティビティ担当の職員さんも含めてみんなで、食事を準備したり、懐中電灯・蝋燭の火を頼

ダンスパーティーで、フラットメイトと。どう踊っていいのか分からないので、実際踊るというよりは食べていましたが…。

私の好きなバグパイプです。これはダニーデンでパレードがあった時に撮ったものですが、他の様々なパレードでも見かけました。

登山に行って、頂上で1枚。どれが私の足でしょう…。

毎週土曜日に駅で行われるファーマーズマーケット。朝早くから大賑わいで、大道芸人が来てたりもします。

ホストファミリーの娘さんのラグビーの試合で。子供ではタックルをしない代わりに、腰に付けている長いリボンを取るようです。

りにゲームやおしゃべりしたりしたことも強く印象に残っています。不便な環境下でこそ、結束し、絆が深まるのかもしれません。

　そして、中国人、マレーシア人、フィジー出身のインド人、9歳の時にニュージーランドに移住したカンボジア人のルームメイトたちもはずせません。はじめは彼らとの会話についていけず、語学センター修了時に感じた自信は崩れ去りましたが、結果的にはよかったと思います。語学センターの先生やホストファミリーは変な英語に慣れていますし、分かりやすいように話してくれます。親切ではありますが、英語力を伸ばすには生ぬるい環境とも言えます。ルームメイトと恋愛から政治まで色々なことを話す中で、英語を覚えていきました。また、彼女達を通してニュージーランドにいながらにして他の文化にも触れることができたことは貴重な経験だったと思います。今後、彼らの国に行ってみたいです。

　その他にも、尊敬すべき語学センター・大学の先生たち、今弘前に留学している学生、一人旅をした時に会ったワーキングホリデーで来ていた日本人学生、私の友達のとっても素敵な元ホストマザー、帰国の際にトランジットで会った中国人学生などなど、たくさんいてここでは語りきれません。留学の第一目的はもちろん英語でしたが、英語自体が自分の分野や就職と直接結びつかない私にとっては、外で生活してみたいという好奇心と、今しかできないという一種の焦りのようなものによるものも大きかったです。英語は日本でも勉強できますし、帰国して使わなかったら忘れてしまうかもしれません。でも、出逢った人達との繋がりが、またどこかで新しい出逢いを生んだり、新しい何かに繋がっていくのかもしれません。少なくとも、今確かにある彼らから影響を受けたこと、学んだことは絶対に忘れません。

　留学から得られるものは、計り知れません。行きたい気持ちが少しでもあるなら、行けるうちに、つまり、学生の間に行った方がいいと思います。幸い、十分な資金と多少の度胸があれば誰でも行ける時代です。それに、交換留学というお得な制度があるのですから、これを利用しないなんてもったいないとは思いませんか。奨学金もあるので、お金がなくても意外と何とかなります。是非挑戦してみてください。（詳細は学務へ）

語学センターの先生とクラスメイトと。先生は大阪で英語を教えていたことがあるのですが、日本語は話せません。たまに変な日本語を言います。

サンドフライ・ベイにいます。でも、危ないので近づきすぎてはいけません。

マオリのハカ。戦いの時のダンスは迫力があって、敵が見たら士気が下がっちゃうかも。

教育学部附属 教員養成学研究開発センター

センター長　日景弥生
専任教員　佐藤紘昭（副センター長）
和久秀樹
兼任教員　長﨑秀昭　山田秀和
中野博之　吉田　孝
福島裕敏　平岡恭一

こんな教師を育てたい
～弘前大学教育学部の新カリキュラム構想～

「教員養成学研究開発センター」は、大学における教員養成の在り方を研究開発する全国初のセンターです。平成15年に設立され、平成17年度に文部科学省により正式に認められました。今年度は2名の専任教員とセンター長を含む7人の兼任教員が配置されています。

児童生徒に働きかけ、反応を読み取り、働きかけ返す教育プロフェッショナル

本センターの組織と活動概要を紹介します。

日景弥生センター長を中心に3つのワーキンググループに分かれております。

①研究企画グループ

教員養成学研究開発センターの在り方、企画運営及び連絡調整、庶務・広報

②養成学研究グループ

「教員養成学研究」の企画・編集、教員養成学に関する研究推進

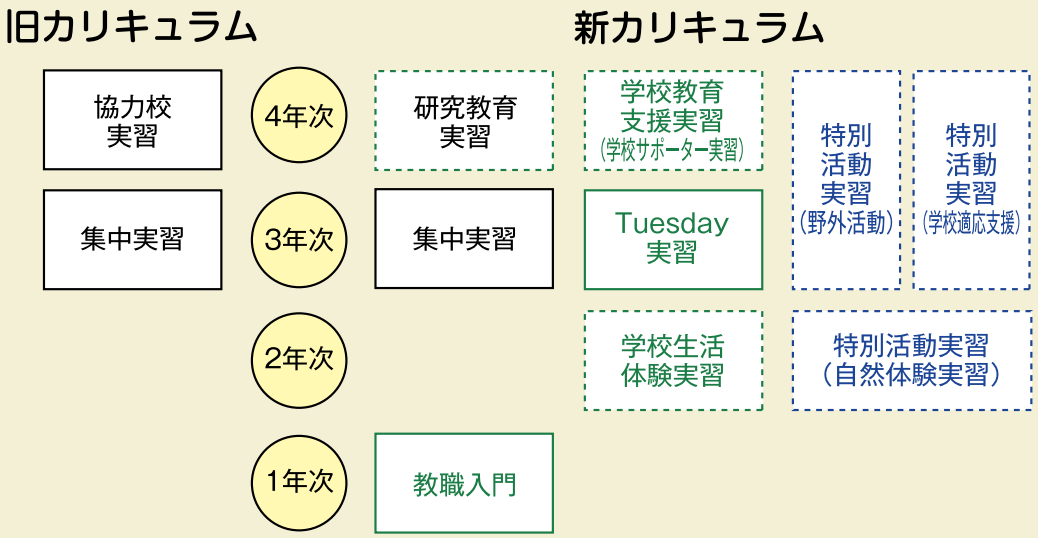
③カリキュラム研究グループ

教員養成カリキュラム研究開発・効果検証・改善、教員養成・現職研修一貫カリキュラムの開発、3年次教育実習の事前・事後指導の在り方

本センターは、教員養成改革のメインエンジンとして、平成16年度入学者から導入された新しい教員養成カリキュラムの〈開発－検証－改善〉に努めています。

今年3月に新カリキュラムの第一期生が卒業したことを受けて、今年度は新カリキュラムの効果検証とさらなるカリキュラム改善作業に取り組んでいます。

教育実習関連科目の体系



新しいカリキュラムの特徴の1つは上図に示すような教育実習関連科目の充実・体系化にあります。旧カリキュラムでは、3年次と4年次にそれぞれ一つずつの実習しかありませんでした。しかし、新カリキュラムでは多種多様な教育現場経験を積めるようになっています。これらの実習のうち、4年生を対象とする「学校サポーター実習」では受講生が学校サポーターとして弘前市、青森市、平川市、西目屋村の小・中学校及び弘前市内の高等学校計43校の教育活動に参加しております。年間20回以上訪問し実践を重ねることにより、長期的なスパンで教師としての仕事をトータルに理解することを目指しています。この学校サポーター実習の実施にあたっては、青森県教育委員会や上記市町村の教育委員会と連携をとっています。多くの方々の暖かいご協力を得ながら将来の教員となる学生を育てています。

次に、新しい教員養成カリキュラムの1つである新科目「教員養成総合実践演習」について紹介します。

本学部では目指すべき教員像として「児童生徒に働きかけ、その反応を読み取り、働きかけ返す教育プロフェッショナル」と定めました。本センターは、これを念頭において実践的指導力のある教員を育成する科目の研究・開発・実施をしてきました。それが平成17年度に始まった新科目「教員養成総合実践演習Ⅰ・Ⅱ」です。この授業は、「教職課程の学びの軌跡の集大成」と位置付けており、4年次を対象に開講しています。昨年度はこの科目の成果を踏まえ、平成22年入学生から教員免許状取得を希望する学生全員に必修化される「教職実践演習（仮称）」のモデル開発を行いました。現在、和久秀樹センター専任教員が主担当となり客員教授の佐藤康子先生と久保富男先生が中心となって授業を展開しています。毎週水曜日の1・2時限と3・4時限におこなっており、多くの先生がどのような授業をしているのか見学に来ていますので、どなたでもいつでも見学にお越しください。

本センターの成果の一部は左の写真にあるような書籍、研究誌にまとめられています。センターニュースとして「協働(Collaboration)」を81号まで発行し、センターをはじめ教育学部の取り組みを分かり易く紹介しています。是非ＨＰでご覧になってください。以上で教員養成学研究開発センターの紹介を終わります。今後ともご支援・ご協力の程よろしくお願いいたします。

（和久秀樹）

教員養成学研究開発センター
弘前大学教育学部

教員養成学研究開発センター
TEL 0172－39－3421
E-mail yousei@cc.hirosaki-u.ac.jp
URL http://siva.cc.hirosaki-u.ac.jp/yousei/

弘前大学に入学したことについて

大学院医学研究科
博士課程1年　古賀稔彦

人は、一生学び一生伝え人間の知識や文化を伝統として引き継いでいく。

学ぶからこそ発見があり喜びがあり、それによって感動が生まれ、自分への生き甲斐を実感出来るのです。

私は今、後輩たちが持つ夢の後押しをしっかりとサポートすることが大きな役目だと思い日々柔道を通し、子供たちをはじめ、沢山の方々をサポート・指導しております。

人をサポート・指導することは、簡単な気持ち、中途半端なお世話では、本当の役割を果たすことは出来ません。

心の底から、本当に自分がこの人のために何が出来るのかを真剣に考え、悩み、それに必要な知識を常に学び続けることが大切なのです。

今の世の中、「自分さえ良ければいい」「自分の家族さえ幸せであればいい」そんな孤立した自己中心とした考え方を持ちながら生きている寂しい時代のように感じています。だからこそ、私たち人間は、誰かのために、何かのために知恵を出し、手助けをし、共に支え、助け合い、励まし合い、協力をしながら生きていくことを、もう一度、取り戻すことが大事ではないでしょうか。私は柔の道で、沢山の人たちから、愛をいただきました。

これからは、私がその愛を伝え後輩たちに活かす時が来たのです。

私が、教え伝えていただいた知識や経験を更に良きものとして、伝えていくための理論を明確なものとしていきながら常に進歩・発展している学問、そして、情熱ある先生方の心を実感しながら学び、ご指導を頂きながら、自分自身、常に一歩前進していける自分であれるために、何事にも真剣に必死に取り組んでおられる、弘前大学へ入学させていただきました。

大学の皆さん、青森の皆さん

私は、「精力善用」「自他共栄」の心を持って、皆さんと共に歩いていきます。

今しか出来ない一瞬一瞬を大切に頑張っていきましょう。

経　歴

1967年	佐賀県生まれ		
1987～92年	全日本選抜体重別選手権	（71kg級）	1位
1988～92年	全日本体重別講道館杯	（71kg級）	1位
1988年	ソウルオリンピック	（71kg級）	3回戦敗退
1992年	バルセロナオリンピック	（71kg級）	金メダル
1996年	アトランタオリンピック	（78kg級）	銀メダル
2002年	現役引退，全日本柔道女子強化コーチに就任		

平成20年度　学生・ボランティア活動助成

平成20年度学生ボランティア活動助成の募集について8件の申請があり、下記の団体が承認されました。選考結果の通知は、平成20年6月11日(水)に学長から交付されました。

団　体　名	申　請　代　表　者　名
児童文化研究部(KIDS')	二　宮　　渉（教育学部）
僻地教育研究会	岩　田　和　也（農学生命科学部）
さくらボランティア	佐々木　刀　太（理工学部）
ひまわりサークル	佐々木　あゆみ（医学部保健学科）
SaBoTen(サボテン)	岩　松　宏　武（理工学部）
環境サークルわどわ	前　田　恭　佑（理工学部）
Teens & Law（青森家庭少年問題研究会）	石　塚　優　士（教育学部）
アダプテッドスポーツサークル	塚　田　香　織（教育学部）

第59回東北地区大学総合体育大会開催

第59回東北地区総合体育大会は、今年度から競技種目ごとに主管大学を設け開催することになり、弘前大学では、バスケットボール(6月28日～30日)、弓道(7月4日～7日)の2種目が開催された。
どちらの競技とも、各競技場で熱戦が繰り広げられた。

(大会で３位に入賞した女子バスケットボール部)

(青森県武道館での大会の模様)

Ⅵ　編集後記

面白くなくてほとんど読んだことがなかった「学園だより」の編集委員になってしまった。面白くないのなら面白い企画を考えればよさそうだが、なかなかそうもいかない。年々授業負担が増加していて研究に費やす時間が減少している。研究で面白いテーマに出くわし、100分の1以下の確率で研究がうまくいったときの面白さはたとえようがない。ここは企画や宣伝のプロを職員として雇って「学園だより」を作ってもらった方が、持ち回り委員が考えるよりはるかに効率がよく素晴らしいものができるはずである。今回は課外活動の特集であるが、お世辞にも本学の活躍は目を見張るものはほとんどなく、私の活躍を代わりに載せてくれた方が見るものには面白いとさえ思ったりする。極めて少数ではあるが、全国レベルの活躍をしている個人や団体もあるらしいが、残念ながらほとんどの学生や教職員に全く知られていないことが多い。

学生諸君！活躍したら、裏表紙の連絡先にご一報下さい。今後の「学園だより」に掲載したいと思います。また、こんな企画を取り上げてほしいということでもかまいません。

(T. K.)

2008年度生協運営と重点課題（総代会報告）

2008年度の取組方針や予算、運営を決定する第47回通常総代会が5月23日（金曜日）に行われ、全議案が賛成多数で可決されました。決定した取組方針をやりきるため、7月までの理事会において具体的な取組計画が協議・決定され、実現に向けた取り組みが進んでいます。

（報告1）運営体制

定款に基づき、理事30名、監事5名が選出されました。理事・監事全員の紹介は、ホームページと生協掲示板（大学会館入口）に掲載しておりますのでご覧下さい。

役　　職	氏　　名	所　　属
理　事　長	荒　川　　修	農生教員
副 理 事 長	上　松　　一	人文教員
専 務 理 事	三　浦　貴　司	生協職員
特 定 監 事	加　藤　恵　吉	人文教員

※代表役員は荒川理事長と三浦専務理事が選出されています。

理事長　荒川　　修
（農学生命科学部教員）

上松　　一
（人文学部教員）

（報告2）重点的に取り組む主な課題

❶2009年度に導入予定の生協の中期ビジョンを、組合員と一緒に協議・策定する。
❷地域と地球に貢献する大学生協づくりの基盤としてKES（環境マネジメントシステムスタンダード）の認証取得を実現する。
❸仕事や施設の改善を進め、組合員や大学が魅力を感じる生協づくりを推進する。

課題の実現のため理事会に4つの小委員会をつくり作業を進めています。特に中期ビジョンの策定については、今後組合員や大学関係者の皆様に、生協への期待や要望についてヒアリングをさせていただきますのでご協力をお願いいたします。

予告　生協まつり開催

生協では恒例の生協まつり企画を開催します。期間中は超お買い得品や抽選くじを用意して、組合員の皆さんに楽しんでいただきます。

■ 開催日

11月10日（月）～14日（金）

■ 実施店舗

本部、総合リビングを除く
全店舗 にて開催します

※10月に発行される生協まつり企画チラシをまずご覧下さい。

● 店舗からのお知らせ ●

■ 後期テキスト 販売のご案内

シェリア・医学店では以下の日程で後期テキスト販売を行います。

【シェリア】 9月24日（木）～10月17日（金）
【医 学 店】 9月29日（月）～10月17日（金）
【割 引 率】
期間中は医書は8％、医書を除くテキストは10％引きとなります。

■ ナクア白神スキーリゾート

09年シーズンパスポート
たびSHOPにて割引価格で受付中！

9/30までの申込　38,000円
10/1～11/30 〃　43,000円

（旧鰺ヶ沢スキー場、通常価格50,000円）